夜の寝覚研究

野口元大

野口元大著

夜の寝覚　研究

笠間書院刊

野　口　元　大　（のぐち　もとひろ）
昭和4年5月26日　長野県に生まれる。
昭和28年3月（旧制）東京大学文学部国文学科卒業。
熊本大学助教授・茨城大学教授・文部省主任教科書調査官などを経て、現在上智大学文学部教授。
主要著書：『うつほ物語（1～3）』
（校注古典叢書　明治書院　昭和44～62年）
『古代物語の構造』（有精堂出版　昭和44年）
『うつほ物語の研究』（笠間書院　昭和51年）
『竹取物語』（新潮日本古典集成　昭和54年）
現 住 所：〒183 東京都府中市小柳町 5-10-11

夜の寝覚 研究　　笠間叢書 231

平成2年5月26日　初版発行

定価 8,755 円（本体 8,500 円）
著　者　野口元大©
発行者　池田つや子
発行所　有限会社 笠間書院
〒 101　東京都千代田区猿楽町 2-2-5
☎03-295-1331(代) 振替東京 1-56002

3391-951231-0924　　科学図書印刷・手塚製本所
（本文用紙：中性紙使用）

『夜の寝覚 研究』 目次

序説

第一章　『夜の寝覚』の流伝と受容……三
第二章　作品の性格と問題点……一七

I　本文批判

第一章　諸本の系譜再建と原型の推定――新出の島原本を中心に――……三一
第二章　黒川本の本体……五五

II　主題と構造

第一章　第一部の構造……八三
一　物語発端部の諸問題……八三
二　宿世の発顕……九五
三　創作意識と表現手法……一一
四　人間観察と心理描写……一九
五　まとめと展望……二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　第二部におけるヒロインの運命と変貌……一三七
一　ヒロインの変貌……一三七
二　運命の自覚と人間的成長……一五六
第三章　第三部における人間の認識……一七五
一　深層の心の発見……一七五
二　生霊事件の心理的素地……一九六
三　生霊事件――自恃の崩壊――……二一二
四　主題の窮極……二三二

附　説

菅原孝標女の作家的資質……二六七
あとがき……二八五
索　引……左一

序

説

第一章　『夜の寝覚』の流伝と受容

一、『更級日記』奥書の定家証言

『夜の寝覚』は、ヒロインの数奇な運命を語り尽くそうとした物語であるが、この物語自身がたどった運命も、まことに数奇としか言いようのないものであった。

平安時代の物語としてはけっして珍しいことではないが、この物語の場合も、作者も成立の時期も創作事情も、すべてさだかではない。そうした不分明さの中で、ただ一つ頼りになりそうなのが、この場合も藤原定家なのである。彼が『更級日記』の奥に、

ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也。母倫寧朝臣女　傅のとのゝはゝうへのめひ也。よはのねざめ、みつのはまゝつ、みづからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ。

と記していることから、作者として菅原孝標女がクローズ・アップされてくる。以後作者を孝標女とする資料は多々目につくようになるが、いずれも右の定家の識語によるもののようで、われわれとしては、この奥書を慎重に検討することを第一にしなければならない。この内容をそのまま信ずるのであれば、問題はそれまでである。近代に至るまでは、定家の権威もあって、その点に異議が差し挟まれた形跡はなかった。

改めて考えてみても、この内容に特別な不審はないように思われる。『更級日記』が孝標女の筆になることは信じ

られるし、彼女の母が『かげろふ日記』の作者の妹であったというのも、ほぼ確かである。さらに彼女が長編物語の作者で、当時卓越した存在であったろうことも、最近の研究が裏づけている。

『浜松中納言物語』は、宿世観・転生観や予言的な夢の信仰などへの傾きの著しさによって、『更級日記』と同作者であろうとする説が、近来さらに強くなってきている。

『みづから悔ゆる』も、『風葉和歌集』に九首の歌が採られていて、かなり長い物語だったらしい。その中にヒロインかと目される尚侍の歌が、

まだ人目知らぬ山べの松風は　こと問ふさへぞ身にはしみける

と見えているが、この尚侍は、どうやら夕顔・浮舟型の女性だったと推定されている（松尾聰『平安時代物語の研究』昭和三〇年　東宝書房）。そして、『更級日記』には、近くまで来ながら、東山に籠っている作者を訪れずに帰ってしまった人に贈った、

まだ人目知らぬ山べの松風も　おとして帰るものとこそ聞け

という歌が載せられているのである。同一作者説の裏づけとするに有力な事実であろう。

『朝倉』は、『風葉集』に十九首、『拾遺百番歌合』に十三首（ただし六首は共通）の歌を遺しており、『無名草子』や『明月記』にも見えていて、かなりもてはやされた作品であったようである。そして、これらの遺存資料から推測される内容は、『更級日記』の作者の手に成るとするのに極めてふさわしい（松尾聰『平安時代物語の研究』参照）。

しかしながら、最初に挙げられた『夜半の寝覚』については、なお断定を留保する意見が根強く存する。それは、『更級日記』を通してうかがわれる作者像と、『夜の寝覚』を創作した精神との間に容易に埋めきれない空隙が感じられるからである。その点に関しては、後に詳しく検討しなければならないので、ここでは触れないが、そればかりでなく、古くから『御津の浜松』とは異なった扱いがされてきたようである。たとえば『続古今和歌集』には、

題知らず　　菅原孝標女

あはれまたいづれの世にか巡り会ひて　ありし有明の月を見るべき

（巻十五　恋歌五　一三二四）

題知らず　　菅原孝標女

なにごとをわれ嘆くらむ　かげろふのほのめくよりも常ならぬ世に

（巻十六　哀傷歌　一三九〇）

と見えるが、これは二首共に、物語中で浜松中納言が詠む歌なのである。この集に採択された孝標女の歌はこれがすべてであり、この物語が彼女の代表作であると信じられていたことを証する事実としてよいであろう。それに対して、『夜の寝覚』の方には、これに類する証跡を見いだしえないのである。

そういう目でみるならば、右の定家の識語にも、問題が残っていないわけではない。まず、これが仮名文で書かれていること。定家の奥書・勘物の類いは、原則としてすべて漢文で書かれる。また、右の識語の最後が「とぞ」という伝聞形式で結ばれていること。これは、定家が以前からの伝承を参考までに書いただけのもので、彼の学問的な研究結果を記したものではあるまいと考えるのに分がある現象であろう。

ただし、それを認めた場合でも、『夜の寝覚』の作者は孝標女だという伝承が、無視しがたいだけの有力さで、定家以前からあったということになり、十分な注意が払われなければならない。それだけ物語作家として、孝標女が偉大な存在だったということであろうし、『寝覚』の成立をその周辺に持っていくことに、ある種の自然さが感じられていたということでもあったろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二、初期受容時代

右の四物語の中でも、『寝覚』は、抜きん出て好評を博した作品だったらしい。どれよりも古くから、かつ広汎にこの物語への言及が見られるのである。

まず成立がほぼ同時代と目される『思はぬ方にとまりする少将』（『堤中納言物語』所収）が、そして時代がやや下っては、『苔の衣』など、明らかにこの『寝覚』の冒頭表現の工夫をまねるところから物語を始めているのである。

昔物語などにぞ、かやうの事は聞こゆるを、いとありがたきまで、あはれに浅からぬ御契りのほど見えし御事を、つくづくと思ひつづくれば、年の積もりにけるほどもあはれに思ひ知られけり。

（『思はぬ方にとまりする少将』）

逢うての恋も逢はぬ嘆きも、人の世にはさまざま多かるなかに、苔の衣の御仲らひばかり、飽かぬ別れまでためしなくあはれなる事はなかりけり。

この頃、権大納言と聞こゆるは、故先帝の御弟、一世の源氏と聞こえし二郎、大将の御弟ぞかし。（『苔の衣』）

これを見れば、『夜の寝覚』の感化がいかにいちじるしく働いていたか、一目瞭然であろう。当然読者間の評判も高いものであったろう。

さらに、久安ごろに成ったかと思われる『源氏釈』（前田本）に、

天人夢の中に琶琵をおしふる事、ねざめといふ物がたりにあり。されども、それ源氏よりさきの事とはみえず。

（宿木）

とあり、すでに十二世紀半ば過ぎには、この物語がかなり古いものと見なされていたことが分かる。（ただし、松尾聰氏の説[1]のように、この勘物が後からの補入である可能性も存する。）

それをおくとしても、なお平安時代に『源氏一品経表白』（安居院澄憲作。永万二＝一一六八年から遠くない時期に成立）を挙げることができる。そこでは、まず、

夫文学之興、典籍之趣、其旨旁〻分、其義区〻異也。

として、仏書・儒書・史書・詩歌の書におのおの異なる旨趣のあることを述べ、次いで、

有二本朝物語事一、是古今所レ製也。所謂落窪・石屋・寝覚・忍泣・狭衣・扇流・住吉・水浜松・末葉露・天葉衣・格夜姫・光源氏等也。如レ此物語者、非レ伝二古人之美悪一、非レ注二先代之旧事一、依レ事依レ人、皆以二虚誕一為レ宗、立レ時立レ代、併課二虚無物事一、其趣且千、共唯語二男女交会之道一。

と、当時の代表的な物語が『落窪物語』以下十二編挙げられているが、その中に『寝覚』の名がある。当時これらの物語が一般に歓迎されていた証拠としてよいだろう。

鎌倉時代に入れば、この『夜の寝覚』が愛読、評価されていた証跡は、さらに著しい。『無名草子』（俊成卿女作？建久七＝一一九六年～建仁二＝一二〇二年）には、

『寝覚』こそ、取り立ててみじき節もなく、またさしてめでたしと言ふべき所なけれども、初めよりただ人ひとりのことにて、散る心もなく、しめじめとあはれに、心入りて作り出でけむ程思ひやられて、あはれにありがたきものにてはべれ。(2)

と、現代の感覚とまったく変わりない総評に始まって、詳細な批評が加えられている。この作者は、「『狭衣』こそ、『源氏』につぎてはよう覚えはべれ」と言いながら、実際の批評になると、『夜の寝覚』には『狭衣』の倍の紙幅を費やしているのである（底本でいえば、『狭衣』は四ページなのに『夜の寝覚』は八ページ）。この物語について語り始めると、ほとんど抑制がきかなくなるかの趣がある。

ほぼ同じころ藤原定家の手で、『拾遺百番歌合』（建仁二年～建永元＝一二〇六年）が編まれた。そこでは、左方『源

氏』〈一〇〇首〉に対して、右方は、

夜寝覚〈二〇首〉　御津浜松〈一五首〉　参河尓佐介留〈一五首〉　朝倉〈一三首〉　左毛右毛袖湿〈一〇首〉　心高幾〈一〇首〉　取替波也〈六首〉　露之宿〈五首〉　末葉露〈三首〉　海人刈藻〈三首〉

となっていて、『寝覚』の評価の高さが明らかである。彼はまた、それから三十年ほどを経た晩年に至って、もう一度物語の選出にかかわっている。『明月記』天福元＝一二三三年三月二十日の記事に、

日頃撰出物語月次〈十二月、五所〉、不レ入二源氏並狭衣一〈於レ歌者抜群、他事雖レ不レ可レ然、源氏当時中宮被二新図一、狭衣又院御方別被レ書〉此所レ撰、夜寝覚、御津浜松、心高、東宮宣旨、左右袖湿、朝倉、御河尓開留、取替波也、末葉露、海人刈藻、以二十物語一撰二毎月五一、金吾清書訖、又加二一見一。

と見えており、十編の物語のうち、九編までが共通し、その評価の順序までがほぼ一致している。これは、必ずしも定家個人の判断と言ってしまうわけにはいかないだろうし、また三十年の歳月の隔たりを思うならば、両者のこれほどの一致度は、すでに定評が確立していたのであろうことをうかがわせるに足りる。

右に「金吾」と見えるのは、当時右衛門督だった為家であるが、その為家が後年撰んだと見られている（樋口芳麻呂「風葉和歌集序文考」『国語と国文学』昭和四〇年一・二月号参照）『風葉和歌集』（文永八＝一二七一年成立）に採択されている物語を、所収歌数順に挙げてみると、次のようになる。（　）内は現存物語中の歌数。下欄に参考事項。

①源氏　一八〇（一七六）　源氏一品経・無名草子・拾遺百番歌合・（明月記）
②うつほ　一一〇（一〇八）　無名草子
③狭衣　五六（五六）　源氏一品経・無名草子・（物語百番歌合・明月記）
④風につれなき　四五（五）　『続々群書類従』に零本
⑤みかきがはら　四一（〇）

⑥いはでしのぶ　三三（八）　零本。
⑦浜松中納言　二九（二三）　源氏一品経・無名草子・拾遺百番歌合・明月記・更級日記奥書
⑧寝覚　二五（七）　源氏一品経・無名草子・拾遺百番歌合・明月記・更級日記奥書
⑨女すすみ　二二（〇）
⑩よその思ひ　二一（〇）
⑪有明の別れ　二〇（二〇）　新発見。無名草子
　朝倉　二〇（〇）　無名草子・拾遺百番歌合・明月記・更級日記奥書
⑬松浦宮　一九（一九）　定家作。無名草子
　四季　一九（〇）
⑮うきなみ　一七（〇）　隆信作。無名草子
⑯緒絶えの沼　一六（〇）　無名草子
⑰左も右も袖ぬらす　一五（〇）　拾遺百番歌合・明月記
　萱が下折れ　一五（〇）
　初音　一五（〇）
⑳海人の藻潮火　一四（〇）
　ひぢぬ石間　一四（〇）
　親子の仲　一四（〇）
　玉藻に遊ぶ　一三（〇）　宣旨作。天喜三年物語合・無名草子
　忍ぶ草　一三（〇）

取り替へばや	一二（〇）	『今取り替へばや』六。無名草子・拾遺百番歌合・明月記
三河にさける	一二（〇）	無名草子・拾遺百番歌合・明月記
鳴門	一二（〇）	
迷ふ琴の音	一二（〇）	
隠れ蓑	一一（〇）	狭衣物語・松浦宮物語・無名草子
みなせ河	一一（〇）	
浅茅が露	一〇（一〇）	新発見。無名草子
心高き	一〇（〇）	無名草子・拾遺百番歌合・明月記
笹分けし朝	一〇（〇）	
すまひ	一〇（〇）	
みづから悔ゆる	九（〇）	更級日記奥書
末葉の露	九（〇）	源氏一品経・無名草子・拾遺百番歌合・明月記

この表からは、多くの事が読み取れる。上位ほど残存率が高い。孝標女作と伝えられる物語はかなり上位を占めている。『無名草子』以後『風葉集』までの時期も物語創作熱は旺盛だったようであるが、そうした中にあっても平安物語の優位性はなお保たれていた等々。そして、『夜の寝覚』はそれらの内でも依然高い声価を維持しつづけていたことも、十分認められてよい。

三、末期受容時代

さらに下って、延慶年間（一三〇八～一〇）には、『玉葉和歌集』の撰進をめぐって、京極為兼と二条為世との間に

訴陳が繰り返された。その第二回の陳状において、為兼は、為世の無知を難じて、

源氏・狭衣・寝覚等物語、条々之外、付レ歌付レ詞、二百十九箇条篇目、為世曽不レ可二存知一。（『延慶両卿訴陳状』）

と述べている。これは、歌道師範家の当主として、勅撰集の撰者として要求される必須の教養の中に『夜の寝覚』が考えられていることを意味するのである。

同じ頃、鎌倉を中心とした東国文化圏では、宴曲が大流行していたが、いまその最も著しい例として、名手月江の作になる「寝覚の恋」を挙げてみよう。

そよや心を摧く端として、世渡る道もいざやさは、恋路に迷ふ習ひの、さまざまなる中にも、眠りは三更五更を重ねても、なほまた夜を残す思ひの切なるは、恋慕の心を痛まする、寝覚めの床に如くはあらじ。夢路に結ぶ契りの、覚めてあやなき夜半の狭筵に、片敷く袖の涙にうかぶ面影よ。いかにせよとて有明の、月につれなきうかれ鳥の、うき音をともなふ寝覚ならん。ね覚をかこつ手枕の、透間の風はさらでも身にしむ。時しも秋の長き夜の、恨みやげにさは尽きざらん。明けぬと告ぐる鐘の音、有難かりし様にも、あの南呂半ばの天津空の、空に心のあくがれけるは、寝覚の中の君とかや。四の調べの音をそへても、雲井をしたひし余波や、この理りなりし思ひならん。寝覚めの時雨、寝覚めの砧、寝覚めの鹿の遠音、いづれかは恋の妻ならざらん。（『玉林苑　下』）[3]

これが、全曲この物語に材を取っていることは、一目瞭然であろう。このような曲が行われているのは、少なくとも教養人たちの間では、この物語が読まれていたとする推測に利があるとしてよいと思われる。月江が鎌倉文化圏内の人物だったとすれば（外村久江『早歌の研究』昭和四〇年　至文堂）、この物語の流布範囲は相当に広範だったとしてよいであろう。

その他にも、洞院左大将実泰作詞の「琵琶曲」なども挙げることができる。これも冒頭まず思いが及ぶのは、

鳳鸞和鳴の声、三尺五行の形、或は玲瓏の響き、或は天地に象る。其絃四絃にして、其声二十弾。流泉ながれ清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com